

五十二枚裏左から三行目に見える了^也と横に記された二箇の漢字の形の草體に壞されたものに違ないと思ふ。かかる形は從來知られた何れの回鶲文書にも見當らないと思ふが、それがかく相異つた、然もその書風及び漢字を挿入した體裁などの上に於ては、著しく相類似した二種の回鶲佛典の上に於て認められるるとすると、兩者の書寫の時代が同一か、若しくは、甚だ相近いものであらうといふ推察を強からしむるに足るものがある。それで此の實義疏の書寫の年代も、やはりほど元の至正の頃であつたらうと考へることに於て決して無理は無く、逆に此の頃のものでないといふ事を證すべき證據は存しないと思ふ。⁽²⁰⁾ 前に見た紙質の相違の如きは、之を當代のものとすれば、無論問題にはならぬ。かくして此等の經典書寫の時代を定め得たとすれば、之を基礎にして、從來其の時代を定め得なかつた、同種の寫本の年代を定むる上に、或る程度まで確な見解を施し得ると思ふ。

九 本書に見ゆる諸種の識語

前項に於て、此の書の書寫を大概元の至正頃のものと見たのであるが、此の書寫については、實は諸種の識語が書中に見えて居るので、もしその書き示し方が適當のものであるならば、かゝる疑問は生じない筈である。然るに惜しい事には、折角書寫の時が記してあつても、それは例の十二年目ごとに循環して現はれる十二支獸の順による年の名を記したものであるから、今日からしては殆ど何等の價值をも有しないものである。併し、既に前に見た如く、これが書寫を至正十年に近いものと見、若しくは何等か更に他の方法に依つて、之に關する基本的の或る年次が定め得らるゝならば、此等の識語中に見ゆる十二支獸の年の名も、必ずしも無用のものではない。且また此等の